

普代村教育委員会 教育長 熊坂伸子  
陸前高田市教育委員会 教育長 山田市雄  
コーディネーター 岩手県立大学 理事長 相澤徹

相澤：

藤原所長さんの基調報告、両教育長さんの校種間連携の発表を踏まえながら、岩手の教育について議論を深めていきたいと考えています。



今、教育の難しい課題を抱えつつ、先生方に努力いただいているわけですが、その教育をよくしていくのは、地域の中で実際に仕事をしている学校と市町村が教育を背負っていく主体・主人公なのだということです。具体的には、先生方の専門性、能力を高めていくことが一番重要ですし、先生方のチームワークが非常に大切になってくると思います。あるいは地域や家庭との関係をどのように再構築していくのか、地域や家庭の教育で落ちている部分を補っていくことが必要です。また、今日お話があった校種間の連携等、様々な課題を現場で抱えながら仕事をしていくためには、絶えず物事を客観視して、評価をし、課題を整理しながら前進を続けていくことが大切です。

最初にまず学力というテーマについて、藤原所長さんからの基調報告を踏まえた形で、山田さんから問題提起をしていただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願ひします。

山田：

以前から中学校において、自分の子どもの地区内での状況がわかる情報（例えば、客観的なテストの結果等）が、保護者に十分な形で提供されていないのではないかと感じていた。それは、中3の保護者としての経験でもあり、他の保護者から相談された経験でもある。

さらに、地域によっては、志望校決定の重要な資料となる中学校3年生2学期の実力テストの結果について、学校内での分析にとどまり、地区または県内で状況を把握するシステムが存在せず、各校毎連絡が取りやすい教員同士が電話で密かにやり取りをして、進路指導の材料としているという話も耳にしてきた。それは、平成5年に出された「業者テストによる偏差値等に依存した進路指導についての改善通達」によるものであると解しているが、客観的なテストのデータが進路指導には不可欠である高等学校の現場にいた者としては、非常に大きなギャップを感じていたところであった。今回のシンポジウムは以上のような思いを抱きながら参加した次第である。

学力向上について、日頃感じていることをお話ししていきたいと考えています。私はもともと高校教員で、今は陸前高田市の教育委員会で仕事をしていますが、学力向上については長年の課題でした。徐々に回復傾向にはあるわけですが、やはり高校と違いますのは、自分の学力の立ち位置を生徒が分かっているのかということです。高校に入学すると、学校、県、東北、全国の順番等、一気に子どもたちの情報がそろ

います。そこが中学校と高校では大きなギャップがあるのではないかとずっと感じていました。基本的に、部活動の競技能力や学力を伸ばすのも、同じスタンスでいいのではないかと思います。子どもたちは、競技力向上の方は、練習試合等で自分の力が分かるのですが、学力については練習試合をする機会が非常に少ないのではないかと思います。自分の立ち位置が分からないのに、興味関心だけでやっていけるのかということをやっと疑問に思っていました。一方では、部活動では、一生懸命対外試合をさせて勝った負けたをしています。学力において、決して以前のような順位を付けて偏差値教育をということを言っているのではなくて、健全な競い合いというのは学力を伸ばすのではないかとずっと思っていました。



**相澤：**

高等学校と中学校の違いや健全な競い合いが必要という事ですがその点についてご意見を伺いたいと思います。

**熊坂：**

健全な競い合いが必要という山田教育長の話ですが、まったく同感です。過度に競争を避けるという傾向があるような気がしています。全員を貼り出す必要はないのですが、上位の子どもたちの成績や努力をみんなで褒めてもいいのではないかと思います。

話が脱線しますが、教育の世界というのは客観的な数字の分析が苦手というか避けたいというところがあるように感じています。エビデンスがみられない、根拠が曖昧だなと思います。P

DCAとはよく言われますけれども、やはり、CとAのところは日ごろから弱いと思っておりました。その辺を見ると、きっちりといいところも悪いところも出していくという事が大切なのではないのかと思っています。



**相澤：**

今、熊坂さんから健全な競い合いというお話と同時に客観的な数字による分析、課題を明確にして次の取組をはっきりさせていこうという趣旨の話があったように思います。エビデンス、根拠というお話もありました。このことについて山田さんもいろいろお考えの事もあるのではないかと思います。

**山田：**

PDCAが重視されるようになったのは近年になってからだと思いますが、どちらかという和学校経営的な形で評価されてきています。しかし、学校経営の一番の基礎はやはり授業です。学校経営にPDCAが必要だとすれば毎日の授業を展開している先生方の指導にもPDCAが必要だろうと思います。先生方一人ひとりが毎日の授業にPDCAを意識して展開していけばそれが必然的に学校経営のPDCAにつながっていくと思います。問題はそのCとAの部分で、チェックとアクションがどれだけ機能しているかという事です。ところが、チェックをするときにどうしても避けて通れないことが他と比較するということだと思います。社会に出た子どもたちは、いずれ競争や競い合いを避けて通れないことですので、徐々に子どもたちをそういう環境に導いていくのも我々の仕事ではないかと思います。

**相澤：**

お二人から問題提起をいただきました。情報をオープンにして課題を分析し、向き合って改善をしていくということは基本的には大切だと思います。しかし一方、そういう雰囲気にならない状況もあるのではないかと思います。それは、問題が起きると、絶えず学校が悪いとか、先生が悪いとか、マスコミも含めて、親も責任の追及を学校にしてくるところがあります。このことがオープンにしていくことを阻害をしていると感じています。改善していくための仕組みが必要なのではないかと思います。その辺は、教育長さんという立場で、ものすごく難しいと思うのですが何かお感じになっていることはありませんか。



**熊坂：**

学校、あるいは教育委員会の隠蔽体質、今話題になっていることの話だと思います。やはり教育の世界以外の人から見ると、教育委員会や学校は閉鎖的なのだろうと感じています。校長先生は先生方を守り、教育長は校長を守るとするのは大切なのですが、問題が発生した場合、それが悪い方向へ働くこともありかねないと思います。子ども第一に考えた場合、辛くても苦しくても、やはりそれはオープンにしていかなければ解決に結びつかないと思います。それを学校や教育委員会だけで何とかしなさいと言われるのは、非常に難しいものですが、方法はあると思います。それは、地域の方に学校へたくさん入っていただくということです。外部

の人の目が常に入る、風通しのいい学校にしていくことで、よい方に向けられると思います。どうしても学校の内輪のことを外にさらけ出すのが苦手という学校もあるかもしれませんが、子どもたちのため、思い切って風通しのいい学校を日本中で目指したら、かなり改善されるのではないかと思います。

**山田：**

学校がオープンにできないのではないかとこの話がありましたが、学力については、かなり地域の方々にオープンにしてきつつあると思います。陸前高田市の学校では、学校通信や学級通信の中で学校の動きが良く見えるようになってきています。校長先生方をお願いしたのは、徳育と体育の部分の学校通信は多いが、知育の部分の通信は少ないので、もう少し知育の部分の情報を地域の方々にも、どんどん出した方がいいということです。地域の方々は学校を支えたい、大事にしたいという気持ちが非常に強いので、こちらからよい情報も悪い情報もどんどん出していけば、もっと地域と一体なって知育・徳育・体育のバランスのとれた教育が展開できるのではないかと考えております。

**相澤：**

お二人からは、あえて学力についても情報公開する等、外部とのコミュニケーションを深めていっていいのではないかとこの話もありました。同時に、私が行政にいた立場から申し上げますと、市町村の教育委員会や各学校の校長先生にお考えいただきたいのは、学力上の課題を客観的なデータでしっかり明らかにし、どう克服をしていくのかといった道筋を学校経営や地域の教育経営の中でしっかり作っていただきたいということです。先ほど藤原所長のお話にありましたが、宿題の出し方という問題提起をしてアンケートを取った結果、いろいろ改善をすることが行われている。部活とスポ少を改善するということが行われている。このように、具体的に一つ一つシステムを変えていくことが物事を前進させていくことにつながり、先



生方の気持ちも変わっていくと感じています。

それでは、視点を変えながら学力の問題に入っていきます。先ほどお二人から校種間の連携のお話がありましたが、ここを最も強調しておきたいということをお話をいただければと思います。

**熊坂：**

普代村での小中一貫教育の概要を説明しましたが、明らかに学力向上の成果が出てきていると思います。小中一貫の取り組みの中で先生方がよい方に変ってきていることをいろいろな場面で実感するからです。そして、小中学校の先生の力がついてきた結果が子どもに現れ、非常によい循環が生まれています。先ほど山田教育長さんのお話の中に中高連携の効果が高校生に出ましたという話がありましたが、小中一貫もやはり効果が大きいのは中学生だと思います。小学生と親しく交流する中で、小学生が憧れの眼差しを中学生に向けますので、やはり中学生はお手本にならなくてははいけません。それは、たぶん幼稚園児と小学生との交流の中でもあると思います。

幼小中の連携を進める上では、先生方が情報を共有していることがとても大切です。小さい村だからできることかもしれませんが、就学支援ファイルという物を作っています。保健センターの乳児検診の時から、特記すべきことがあれば、それが子ども園に行きます。子ども園では、先生が気が付いたことを記入して、それをそのまま入学と同時に小学校に渡す。そして小学校も担任の先生が、このような対応が有効だということを書き、中学校へ渡すというものが就学支援ファイルです。できれば、高校へ進学した時に渡せたらいいと考えます。私の理想では子ども園の入園式に中学校の先生方も来てほしいし、中学校の卒業式に子ども園の先生方も出て一緒にお祝いをしてほしいと思います。このように、幼小中で一貫して子どもたちに目を向けるというやり方を模索しているところです。

**相澤：**

熊坂さんのお話をちょっと深めていきたいんですが、幼・小・中の一貫した教育を考えられた原点として、どういう思いがあったのか、お話いただきたいと思います。

**熊坂：**

全国で小中一貫教育が行われているという情報はありましたが、取り組むに当たってはきっかけがありました。小学校の統合再編の時に、各地に出向き、村民のみなさんとお話をした際、ある地域の方が子どもたちの少子化、複式学級の解消等で統合を考えるのは分かるけれども、統合した先の普代村の教育の未来が見える統合であって欲しい、統合がゴールでは寂しいという声がありました。その中で、普代村に小中一貫教育はどうかということを実際に考えるようになりました。そして、小中一貫教育ありきではなく、教育ビジョンの中の一部に小中一貫教育を位置づけたということです。

**相澤：**

子どもたちの学力のことや目標である自尊心を高めていくということについて、現状を地域の方にオープンにしてお話しされていると思うのですが、いいデータであれば抵抗はないのかもしれませんが、そういうことまでは地域に話す必要はないのではというようなこととかがあるのではないかと思います。いかがですか。



**熊坂：**

普代村は学力を向上させるのが長年の悲願です。普代村は漁業の村で、かつて漁業の景気がよく、勉強なんかなくても健康で漁に出ることができれば豊かな生活ができるという時代が

確かに存在していました。そのころ、大人は仕事に没頭しすぎて、子どもの教育に時間を割けなかった時期があるという反省をたくさんの方々からお聞きします。私が各地でお話をした際に、学力の厳しい状況をお話ししたら、住民の方から、「教育長は自分たちの子どもは頭が悪いと言うのか。」と非常に怒られました。私は、情報の出し方、説明の仕方、あるいは共有の仕方というのは工夫が必要で、正しいデータだからそのまま出せばいいというものではないと反省しました。まず、信頼関係を作ることから始めて、私自身を信頼していただくことを通して、本音を少しずつ出せる、情報も少しずつ出していけると考えています。



**相澤：**

幼小中連携や一貫教育という大きなシステム作りという枠の中で、学力についても取り組んでいくという考え方で、地域との信頼関係を作っていく。その中で、データをどんどん出していき、地域の方々と一緒にいい教育を作り上げていこうということだと強く感じました。次に山田さんのほうから、先ほどの校種間連携の取組のお話を含めて強調したいことがありましたら是非お願いします。

**山田：**

校種間連携は生徒にも教員にも非常にいいということが言えるのではないのでしょうか。一言で言ってしまえば、子どもが成長していくに当たって、次の世界をきちっと見るということが非常に大事だと思います。ともすると、我々教

員も次の世界の入り口しか見ていないんじゃないかなという気がしています。例えば、高校に入れたならば、あとは高校の先生が指導するし、中学校に入れたら中学校の先生が指導するから、そこでどんなことが行われているかはわからない。また、小学校での生活指導と中学校で行ってきた生活指導が一貫していたかどうか。保護者からみれば、同じ義務教育の中の一つの小学校から一つの中学校なのですが、小学校と中学校との教育目標をすりあわせ、同じところは続けましょうという形ではやってこなかったと思います。陸前高田市では、4月から3つの小学校から1つの中学校に統一されますので、小学校連携を作っていけたらいいと思います。ここでは、子どもたちも教員も先を見越した指導が非常に大事だと思います。高校に入ってから学習はこのようになるということが分かっていると、子どもたちも学習への張り合いが沸いてくるのではないかと思います。それは小学校と中学校も同じだと思います。まず、小学校と中学校の校長先生がお互いをしっかり理解し合っどう連携していくのか、そこをリードするのは校長の務めではないかと思います。

**相澤：**

先を見越した教育という視点の大切さというお話だったと思います。私も今、県立大学の若者を見ていますと、就職という大きな壁があります。学生たちは、小学校、中学校、高等学校が終わって大学に入って、いよいよ就職だという時に、そこで壁にぶつかって悩んでいる姿に数多く出会うことがあります。学生たちはいずれ社会に出ていくということを見越して教育を考えて行かなければだめだということも強く感じることがあります。何かお考えがございましたらお願いします。

**山田：**

盛岡三高に赴任した時、4月に先生方に話したことは、大学に入るだけの高校であってはならないということです。大学に入って学び、そしてまた社会で活躍するという人材づくりを高

校の教育活動の中で展開していかなければならない。すると、教員は、ただ大学入試を突破する教科の力だけやっていたらいいというものではなくて、今社会でどういう人材が求められているのかということを知っておかなければなりません。あるアンケートによれば、「主体的に物事を考えて、積極的に発信できる若者がほしい」という回答が多かったそうで、キーワードとすれば挑戦、チャレンジ精神ということになります。受け身からの脱却を目指し主体性を持つことが重要で、そういったキーワードを意識しながら、毎日の教育活動を展開していかなければならないと思っています。

**相澤：**

教育の本質にかかわるようなお話であったと思います。残された時間が少ないので、一言ずつ地域の教育を担っていく教育長というお立場で考えていること、実現したいこととお話してください。

**熊坂：**

これから普代村で取り組んでいきたいのは、学校の安全・安心を確保することです。小中一貫教育も学力向上も、命あってのものだねということを東日本大震災で痛感しました。学校が無事だったのは奇跡だったと思っていますが、奇跡は二度はない、一刻も早く安全な学校を建てたいということと幼児教育を充実させていくことが目指しているところです。

**山田：**

被災者は本当に大変なんですけれども、実は本市の先生方も被災者でして、子どもたちのケアと同時に、先生方のケアもまだ続けていかなければならないと考えています。しかし、こんな時だからこそ、生徒にしっかり学力をつけましょうと校長先生方に呼びかけています。子どもたちが大きくなった時、大変な時に学校の先生たちは、自分も被災している中、自分たちを一生懸命教えてくれた、一生懸命伸ばしてくれたという思いが必ず残るので、そういったことが人材育成につながっていくのだと思います。

先生たちには本当につらい中、申し訳ないけども、子どもたちのために一生懸命やりましょうと呼びかけました。当面この姿勢は続けていかなければならないと思っています。



**相澤：**

ありがとうございます。まとめにはなかなかならないんですが、私が感じたことだけ手短かに2つ申し上げます。

1つは、教育の第一線でお仕事をされている先生方を含めた教育に携わっている方々が、学力という課題に対し、しっかり分析しつつ立ち向かっていくというマインドを持っていきたいと思っています。また、校種間連携にかかわって、子どもたちの教育を前進させるために、校種の壁を乗り越えていくという強い気持ち、覚悟が非常に大切だということを感じました。

もう1つは、校種間連携や部活動・スポーツ少年団の在り方等、大きなシステムの改革ということが、実は教育を前進させていくために大切なことではないのかということを感じます。その辺は、先生方ももちろんのこと、教育行政あるいは学校の校長先生をはじめとしたリーダー層の中でも、是非お考えいただきたいと考えます。そういうシステム面のことも念頭においていただきたいということ、強く感じた次第であります。

お二人には率直なお話を聞かせていただき、大変有り難かったと思います。以上で終わらせていただきます。ありがとうございました。